次郎長

次郎長翁を知る会
会報　第27号
平成22年9月10日発行
発行所　〒424-0821
静岡市清水区相生町6－17
(財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054)352－7331
発行人　竹内　宏
題字
編集人　田口英爾
印刷所　㈱ニシガイ
TEL (054)352－2188

森の石松はどのように創られたか

――講釈師見てきたような嘘をつき――

静岡大学名誉教授　田村貞雄

本稿は六月十一日の知る会総会での記念講演「森の石松の創作」をベースに田村先生が特別に書きおろされたもの。参考文献にも注目されたい。

次郎長物の最初は、次郎長の養子だった山本五郎（のち天田愚庵）が、一八八四年（明治十七）に書いた『東海遊侠伝』である。

ここに「三州の石松」という人物が登場する、これは実在の人物で、愛知県新城市の出身で、墓も同所にある。この「三州の石松」を、遠州森町で育った「森の石松」という人物に創り替えたのが大正時代で、これは浪曲師と小説家の合作であった。

田村静大名誉教授

（写真は静岡新聞　平成二十二年六月十三日）

明治時代には、初代玉川勝太郎が次郎長物を演じていた。松廼家京伝（初名清竜のち太琉）は次郎長と交流があり、次郎長の伝記を編纂したが大成せず、三代目神田伯山に原稿を贈呈したという。その三代目伯山は明治末期から次郎長伝で人気を博し、「次郎長伯山」といわれた。

『東海遊侠伝』では、三河の石松は次郎長に金毘羅代参を依頼され、帰りに近江の見受山鎌太郎を訪ねている。

当時、人気を博していた上方落語「東の旅」では、伊勢参りに出かけた喜六と清八が、京都伏見から淀川を三十石船で大坂八軒家に戻る筋書きである。

三代目伯山は、石松をこの三十石船に乗せた話を作り、乗る時に大坂鮨を買ったことにした。これでファンが関西にも広がった。石松は「生まれついての左の一眼」とされていた。

太田川を挟んで森町に隣接する飯田の出身の小説家村松梢風も石松の話をいくつも書いた。三河の石松を「森の石松」と命名、森町で育ち、森の五郎の子分になったという話を創ったのは三代目伯山と村松梢風である。ただ梢風は、石松は喧嘩で「左の眼を撲たれ、眼玉が三寸程飛び出し」たとした。この部分は次郎長の別の子分豚松がモデルのようである。ほかに一寸借松（ちょんがりまつ）、森ノ新虎などもいるが、森の石松はこれらの人物から合成されたもののようである。

昭和初期に人気を博したのは、二代目玉川勝太郎で、ラジオでも人気者となった。

ここで登場するのが、二代目廣澤虎造である。虎造は神田ろ山（講釈師）、司馬龍生（落語家）と地方巡業をしながら工夫を凝らしていた。一九三〇年（昭和五）ころ、青函連絡船のなかで旅の一座と同船したが、座長が失態を演じた若い座員を「てめぇみたいな馬鹿ぁねえや。てめえの馬鹿は、死ななきゃなおらねえ」と叱った。

そこで虎造が一升瓶を持って近づき、座長と酒を汲み交わした。虎造「お言葉の様子ですと、東京のお方ですな」、座長「江戸っ子ですよ」、虎造「お生まれは」座長「神田の生れよ」、虎造「そうですか、あっしは芝の生まれです」。そこで虎造は乗船するときに買った大坂の押し寿司を、座員たちに差し出した。

このやり取りを同船していたろ山、龍生と相談して、「森の石松　三十石道中」のなかで生かした。これで関西にも東京方面にも強い人気が生まれた。これは吉川潮『江戸っ子だってねえ　浪曲師広沢

虎造一代』（日本放送出版協会　一九九八年）による。

二俣線開通と森町――掛川豊橋間の二俣線開通の前年の一九三四年（昭和九）四月九日と十日、周智郡森町で、虎造とろ山が公演した。その時「旅行けば花橘に茶の香り、遠州森町よい茶の出どこ、娘やりたやお茶摘みに」の外題付けを作った。これには一九三二年（昭和七）作成の森町のお茶問屋島房太郎の歌がヒントになったという。

こうして「流れも清き太田川」「遠州森町良い茶の出どこ　娘やりたやお茶摘みに　ここは名代の火伏せ神　秋葉神社の参道に　産声上げし快男児」という名調子が生まれた。

ただし間違いが二つある。秋葉神社は明治維新後の一八七三年（明治六）の創立。近世は秋葉三尺坊大権現である。

また森の茶が有名になるのは、維新後太平洋に汽船が運航しはじめてからで、三河の石松は開国した一八六〇年（万延元）に閻魔堂ですでに殺されている。

そして石松の墓が翌一九三五年（昭和十）森町内の大洞院につくられた。ただし三河の石松の墓は愛知県新城市にある。

一九三五年（昭和十）ころから浪曲はラジオで放送されるようになった。まだ「石松代参」は二代目玉川勝太郎の独占であった。虎造は同年四月十日大阪放送局から「森の石松」を放送しているが、虎造の「石松三十石船」がラジオで放送されるのは、一九四三年（昭和十八）三月七日がはじめて。五月のレコード発売で一挙に全国に広まった。

要するに「森の石松」は、三河の石松らをもとに、浪曲師と作家が次々に物語をふくらませた架空の人物であった。

《参考文献》

①山本五郎（鉄眉）（天田愚庵）『東海遊侠伝　一名次郎長物語』（輿論社　一八八四年　全一八〇ページ）

高橋敏『清水次郎長と幕末維新　「東海遊侠伝」の世界』（岩波書店　二〇〇三年）に全文掲載

②京山小円口演・井下士青速記『清水次郎長大政小政・鬼面山谷五郎』（大阪・岡本偉業館、年不明、一四四ページ以下欠如）

③中島儀市『明治水滸伝　清水次郎長の伝』（序：一筆庵可候）（一八八六年、一六〇ページ、八五ページ）

④『明治水滸伝：清水次郎長』（一筆庵可候序）（日吉堂　一八八九年、一八三ページ）

⑤『近世侠客水滸伝』清水次郎長明治水滸伝（一筆庵可候序）明治侠客伝　浜の松風（梅亭金鵞序）落花清風慶応水滸伝（柳亭種彦）（日吉堂　一八九〇年）

⑥一流斎文雅講演・酒井楽一速記『侠客清水次郎長』（文事堂　一九〇〇年、一八六ページ）

⑦今村信雄・神田伯山講演『清水次郎長』武侠社長編講談第一巻（武侠社　一九二四年、三二〇ページ）

⑧神田伯山口演『清水次郎長』第一巻（大阪・盛文館　一九二五年）第二巻・第三巻（改善社　一九二五年）

⑨神田伯山口演『清水次郎長』（改善社　一九二五年、三八〇ページ）

⑩『定本講談名作全集』第五巻（講談社　一九三一年）

鼠小僧治郎吉　鼠形変の巻・刻印金の巻・嬌艶悲愁の巻（神田伯治）、清水二郎長　名物男売出しの巻・裸体道中の巻・血煙荒神山の巻（神田伯山）、快男子　城山落城訣別の巻・大鵬雄図飛翔の巻・新日本仁礼港の巻（一竜斎貞鳳）、短・中編読み切り　毛谷村六助（一竜斎貞鳳）、佐倉宗五郎（桃川燕友）、編末解説（宝井馬琴、一竜斎貞鳳）

⑪村松梢風『清水次郎長』（創作講談5　成象堂　一九二五年、一八二ページ）

⑫村松梢風『正伝清水の次郎長』（騒人社　一九二七年）、『現代大衆文学全集』34巻「村松梢風集」（平凡社　一九二八年）所収

次郎長の墓参をする広沢虎造。昭和二十五年頃。右側は小塚明男、若山セツ子

⑬河村繁俊編『近世実録全書』第十九巻（明治編纂の実録　三）清水次郎長　四千両事件　雲井竜雄（秋亭実）島田一郎（岡本起泉）江崎五郎実伝記　小狐礼三（早稲田大学出版部　一九二九年）
⑭静岡県現勢誌5『侠客気質と日本精神　清水の次郎長』（静岡県現勢誌編纂所　一九三四年）
⑮相川直弘編『日本一首継親分安東文吉伝史料集』上下（一九四〇年）
⑯相川春吉編『安東文吉基本史料1』静岡郷土研究会　賤機叢書　一九五八年）（葵叢書刊行会・太田書店　一九七七年）
⑰佐野孝『講談五百年』（鶴書房　一九四三年）
⑱正岡容『雲右衛門以後』（文林堂双魚房　一九四四年）
⑲村松梢風『森之石松』（森町商工会　一九五三年　一五ページ）
⑳戸羽山瀚『清水の次郎長』（歴史新書　鱒書房　一九五五年）
㉑村本山雨楼『遠州侠客伝』（遠州新聞社　一九五六年）
㉒戸羽山瀚『清水次郎長正伝』（利根書房　一九六〇年）
㉓吉川義雄編、安藤鶴夫監修『講談名作全集』第一巻（普通社　一九六一年）神田ろ山「男は次郎長」三巻　神田伯山「関東七人男抄」
㉔正岡容『日本浪曲史』（南北社　一九六八年）
㉕正岡容『定本日本浪曲史』（岩波書店　二〇〇九年）
㉖中沢正『考証東海遊侠伝』（雄山閣出版　一九七三年）
㉗安斎竹夫『浪曲事典』（日本情報センター　一九七五年）
㉘田岡一雄『山口組三代目　田岡一雄自伝』（徳間書房　一九七六年）
㉙『大衆芸能資料集成』第六巻「寄席芸」（三一書房　一九八〇年）
㉚今川徳三『東海遊侠伝――次郎長一代記』（教育社　一九八二年九月）
㉛芝清之編『東西浪曲大名鑑』（東京かわら版　一九八二年）
㉜芝清之編『浪花節　東京市内・寄席名及び出演者一覧』（月刊浪曲編集部　一九八六年四月）
㉝芝清之編『浪花節　ラジオ・テレビ出演者及び演題一覧』（月刊浪曲編集部　一九八六年六月）
㉞橋本勝三郎『「森の石松」の世界』（新潮社　一九八九年）
㉟芝清之『日本浪曲大全集』（月刊浪曲編集部　一九八九年）
㊱芝清之編『新聞に見る浪花節変遷史　明治編』（月刊浪曲編集部　一九九七年四月）
㊲芝清之編『新聞に見る浪花節変遷史　大正編』（月刊浪曲編集部　一九九七年六月）
㊳吉川潮『江戸っ子だってねえ　浪曲師広沢虎造一代』（日本放送出版協会　一九九八年十月）（新潮文庫　二〇〇二年）
㊴大西信行編・正岡容著『定本日本浪曲史』（岩波書店　二〇〇九年）
芦川淳平　大西信行編「浪曲史年表」
㊵「遠州の小京都――『森町』と『森の石松』」（『NEOぱんぷきん』二〇〇七年十一月号、ぱんぷきん出版磐田編集部）、のち小林佳弘編『静岡県内「信州街道」塩の道　今昔物語』（遊行塾　二〇一〇年）に収録

わが家に残る鉄舟戒めの書

山本量正

我が家の居間の鴨居に縦二十四センチ、横百五十センチの扁額がかかっている。山岡鉄舟が次郎長に与えたとされるもので、そこには「酒　女　富貴はだれもみんなすき　我（わが）たのしみは此内（このうち）でなし」と書かれていて、右側に酒の徳利とぐい呑み、女性の櫛、穴あき銭の絵が添えられており、なかなか洒落た扁額である。

この扁額については田口会長補佐に平成十七年八月、船宿「末広」でご披露していただいた。

意味は「酒や遊興、裕福な生活は誰もが望むが私の生き方はこういうものの中にはない」というもので、これは鉄舟が次郎長に与えた人生の指針だと思われる。そしてこの内容は、日蓮宗の僧侶の研修会等で高僧が説教のなかでもたびたび引用されたほどのものである。

では、なぜこの扁額がわが山本家にあるかというと、次郎長と三代目おちょうの孫である入谷麟助（三代目おちょうの前夫の子である「入谷清太郎」とおちょうの姪である「はる」との間の長男）に私の祖父の妹「恒」が嫁いでおり、その関係で

鉄舟の扁額

何かの縁でもたらされたものだと思われる。

ところで、我が家は徳川家康から特権を与えられた清水湊四十二軒の廻船問屋の一軒として本町に「山本屋清右衛門」として幕末まで続いていた。

そして幕末から明治初めにかけての次郎長の庇護者は同じ廻船問屋の「松本屋平右衛門」であった。天保二年（一八三一）生まれだが金融経済の変革の犠牲となり明治四年（一八七一）わずか四十歳でこの世を去った。（「松本屋平右衛門」については多喜義郎氏の「しみずの昔」や田口会長補佐の書物などをご参照ください）

この「松本屋」の店はわが山本家と妙生寺とのちょうど真向かいにあった。

私の祖父である量平や父の房之助からの伝承では、次郎長は松本屋へ訪れる行き帰りに我が家にもよく寄って曽祖父の清五郎とおしゃべりをしていったそうである。（こういう関係が前述の通り「恒」が次郎長の孫に嫁入りした伏線であろうか）

この辺の話は戸田書店発行の季刊「清水」（22号）に私の祖父量平や父房之助が清五郎から聞いた話として次のような記事がある。

『（次郎長は）背丈は高くなかったが、肩幅が広くがっちりした体格で、腕は樫の棒のように堅く、頬骨が出っ張った顔つきをしていた。眉毛がうすくて目が細かったので、笑うと目が一文字になってお婆さんのような顔になった。年中めくら縞（濃紺の無地）の着物に焦げ茶色の帯、腰に手拭いをぶらさげて冬でも素足にわら草履を突っかけ、浅黄色の股引をはいていることが多かったそうである。酒を飲まないくせに酒商売の清五郎とは気が合って店を通る時には「清五どん、いるかイ。お茶をいっぱいごちそうにならずか」といって入ってきて、枡酒で一杯やっている客の仲間入りをして話し込むのを楽しみにしていた。どんな時でも若い頃の話はしたがらなかったが、興が乗ると「そん時、オレが刀をさっと抜いてなァ」と身構えると今まで笑っていた顔に一瞬殺気がみなぎり、目がらんらんと輝いて、周りの飲兵衛たちは思わず盃を置いて見守ったものだという。「斬り合いの場合、胴から上はそう簡単に斬れるもんじゃぁない。みぞおちをねらって思いきった突きをいれるか、又は刀をふりかぶって肩を斬るふりを見せて、さっと向こう脛をひと薙ぎすりゃぁ、相手の奴は造作なくぶっ倒れたよ」とは次郎長の語り。』

最後に前述の入谷麟助と恒の間には啓一、篤治という二人の息子があったが残念ながら啓一は昭和二十年三月フィリピンレイテ島で戦死（陸軍大尉）、また篤治も昭和二十年八月十六日（終戦の翌日）に高知県沖で海軍震洋隊（特攻隊）の不慮の爆発事故で戦死（海軍中尉）した。

この二人が佩用した軍刀は次郎長の愛用した長脇差（どす）から拵えたものだと聞いている。（運営委員）

勝蔵の肖像

秋の一泊旅行は石和温泉

●黒駒勝蔵と友好親善の旅

次郎長生涯のライバルだった黒駒勝蔵。怨讐はすでに150年の歳月の中に流れ去っています。ご子孫や地元山梨県の方がたと親睦をはかりながら、名勝や旧蹟をたずねます。

日　時：平成22年11月23日、24日

行　先：山梨県笛吹市・黒駒勝蔵碑
　　県立博物館など

宿　泊：石和温泉・ホテル八田

参加費：29,000円

お申込みは TEL054−352−7331 へ